

小西和の景観論

津 森 明

小西和（1873～1947）の「瀬戸内海論」（1911年刊）は、瀬戸内海を総合的に論じたものとして嚆矢であろう。また地域学研究の方法としても注目すべきで、刊行当時も地方振興が叫ばれていて、まさに時宜を得た論文だった。

刊行後、88年を経て時あたかも瀬戸内三橋時代であり、この小西論文は地域学の基本を教えており、瀬戸内海学、香川学の提唱にもなっていて極めて関心のある研究である。小西の没後50年、この論文の口語訳を志し、1997、8年に「口訳・瀬戸内海論」上下を上梓した。

小西は、讃岐寒川郡名村の素封家に生まれ、長じて愛媛県立中学校（注1）に進学、のちに札幌農学校に学んだ。鄙びな讃岐の山間の村から出た少年は、初めて汽船で外洋に出て北海道に赴き、大きいカルチャーショックを受けた。このことは「瀬戸内海論」の序文にもしたためている。特に彼の景観に対する最初の思考はこの最初の北海道訪問と日本海の航海経験などによって培われたようである。

小西は「瀬戸内海論」の緒言において『予は内海の沿岸に生まれ幼い折からその山水に接して不知不識の間に之が感化を受けた。そして海洋は凡てこのやうなものと思ふて居たが笈を負って札幌に赴く途次初めて外洋に航し、嚮日の誤謬にに気付いたのである』と、に書いている。

また新聞記者として日露戦争に従軍取材して無味乾燥な風景ばかりの朝鮮半島、満州から帰国、関門海峡にはいるや否や美しい山水に接して形容しがたい感慨を覚えたと記す。

『…帰路、船が関門海峡に入るや内海の山水が秀麗を極め殆ど形容の辞なきを感じた…』その後、シベリア東部、樺太（サハリン）にも歩を運び『ロシア領西比利亜の東部に遊び沍寒、陰鬱、荒涼な風景に接するに及んで爛美な内海を慕ふの心がついに頂上に達した…』と記し、瀬戸内海の自然美を絶賛する。

もちろん「瀬戸内海論」は景観のみに絞ったものではないが景観があるからこそ外国人の来訪も多く、そのために『世界の人々を招致すべきであらう』（緒言）と結論づけるのである。それが地域の発展につながると集客論を展開する。

翻って今日、瀬戸内海は経済的、工業的に発展している先進国の閉鎖性海域として種々の面で世界から注目されており、モーターゼーションに即して長大橋が三本もかかったため便利になったが環境上には憂慮すべき問題を抱えることになった。また景観上も自然公園として果たしてこれでよいのか、経済優先ではないのかという指摘もされている。

そこで小西の景観に対する考え方を検証して今日の瀬戸内海の景観にも触れてみたい。小西の景観論のきっかけは自ら執筆した「日本高山植物」などにもあるように地学、植物学などがベースになっており、札幌農学校の先輩である志賀重昂（1863～1927）の「日本風景論」（注2）「世界山水図説」伊東銀月の「日本風景新論」などの著作も刺激になっているに違いない。

また小西は愛媛県中学校から岡山県の学校に転じているがこのころに日記（注3）によると、岡山でアメリカ人の講演を聞いている。そこで外国人のものの考え方などに接して彼の思考も大きく影響を受けたようである。愛媛県中学校時代の恩師山下敬太郎の影響も大きい。山下は彼の入学後まもなく渡米するので接触は短い。しかし時間の長短ではない影響があったようである。

さらに札幌農学校にはいってからはすでに離日していたがクラーク博士の影響、大先輩の志賀や新渡戸稲造ら碩学の感化も受けているようである。クラークの在日は極めて短いとその感化を受けた人は非常に多くここでも時間の長短は問題でない。

小西は『瀬戸内海を国立公園に』という叙述（注4）で、『明治三十九年に高山植物に関する一文を朝日新聞に発表、そのあと「日本高山植物」を上梓したがアルプスの宣伝をしたわけで報知新聞は“この論は高山植物界に警鐘を鳴らした”と評した。当時日本アルプスという呼び方はなく自分の叙述が本邦初だった。瀬戸内海を国立公園にせよというのは自分の出身地だからというような感情からではない。永久、内外人士の観光のためはもちろんのこと家庭教育、社会教育、健康上から必要だと考えている』と述べている。

日本アルプスの命名も小西であったことは彼の一文から分かる。しかし彼はアルプスの美は瀬戸内海の比ではないと言い切っており、その理由を“水”がないことをあげている。山水があってこそ自然景観が生きるというのが彼の景観論の骨子であったようである。

小西は欧米人の日本観光の目的は富士山、桜、それに瀬戸内海だと主張する。これは後述のように自ら桜苗の植樹という有言実行になって表われる。

瀬戸内の景観は、海上の楽園、世界の公園であると主張、そのうえ世界的航路に当たっていることが観光客を呼ぶ要素だとしている。とくに景観としてはその夜景が最も素晴ら

しいとしている。

新渡戸稲造は同書の推薦文で『瀬戸内海は山容水態，両つながら秀麗明媚にして何れの方面より観察するも殆ど一点の避難すら挟むこと能はず。真に天下の絶景なりと謂ふべし...予は実に世界の宝石なりと断言せんとす』と記している。

本書執筆後，衆議院議員になった小西は，大正8年帝国議会で持論の「外客招致および待遇に関する案」「史跡名勝天然記念物保存に関する件」を提出している。議会でこの二件と，富士山を中心とする景観は世界無類だと述べて瀬戸内海と富士山とを国立公園にするよう主張するのである。

美しい内海の代表の一つが小豆島だと述べており，その景観の基は花崗岩の台上に火山岩が乗り，そこに青松などの樹木が彩りを添えると主張する。ここにも地学の素養が顔を出している。すべてにおいて自然，人文科学の両方がベースになっているところに説得力があると言えよう

小豆島の景観が寒霞渓の美のみをいう一般論を退けて景観はむしろ島全体で，巖島と並ぶ内海の大壁だとしている。海際の風景もそれ自体美しいが展望台としても評価できるとする。これは四方指という島最高峰などを指しているのである。

芸予海域もまたその景観は世界無比といい，ここは極東の桃源郷とさえいえるほどだという。巖島は小豆島と並ぶ内海の大壁だがここは巖島神社があることが大きい。観光地としての条件は景観とともに歴史的背景が必要だがそれがある。

小西は景観保存により観光客誘致するためにも城跡などの史跡や神社仏閣など文化財の保存が必要とも述べていることに注目したい。国立公園法案の提案と史跡名勝天然記念物保存など文化財保存も訴えるのである。

小西の私淑したとみられる志賀も「日本風景論」で，日本の風景の保存を強く訴えている。

スエズからマラッカ海峡を超えて東シナ海に出ても大きい葉っぱの木や原色の花が咲いているくらいで何の美しさもない，関門海峡を通ると左右は繊細なまでの神経で神様が造った内海の風景があり，見る人をうっとりさせる。

このことは自分の大陸からの帰国の際も感じたし，岩倉具視も外遊からの帰途に書いた日記にも認められていることをあげている。

地理学者リヒトフホーフェンはじめ多くの外国人の文にもこの繊細なまでの瀬戸内の風景が描かれている。これらを総合的に見ると美しい風景とは海陸の見事な調和，白砂青松，

適当に散らばる島嶼といった自然の繊細さが求められる。

リヒトホーフエンは「シナ旅行日記」（注5）のなかで『広い区域に互る優美な景色で、これ以上のものは世界の何処にもないであろう、将来この地方は、世界で最も魅力ある場所の一つとして高い評価を得、沢山の人を引き寄せることであろう』と、その風景を称えている。

「瀬戸内海論」の論述の方法については先述の志賀重昂の「日本風景論」の影響が大きいとみてよく、小西も自然科学から論じており、地質、地理学分野からの切り込みが同様な手法である。また小西は新聞記者時代から絵筆の才能があり、ふんだんに挿絵を挿入してビジュアルにまとめている。同じ香川県出身の小島烏水の「日本山水論」伊東銀月の「日本風景新論」などの著作も参考文献にあげている。

志賀などと同様に日本の火山地帯の特異性から奇岩など独特の風景を演出している例を引き、温泉郷などにもかなり力を入れて触れている。別府の間欠泉のところでもニュージーランドのノース・アイランドのものと比較するなど外国との比較が多く当時、訪問していないので相当の文献に当たったことがうかがえる。

外国人の考え方についても直接講演会などで聞いたもの以外にも『日本旅行案内』のチェンバレンら多くの外国人の文献も引用している。大陸については満州、シベリア、樺太の取材で体験しているだけに北海道同様、わが国との比較は容易にできたようである。

新渡戸は『瀬戸内海は世界の宝石である』と述べているがトーマス・ノックは『金剛石である』と称賛し、リヒトホーフエンも『内海の優美さは世界無比である』と述べ、将来人口の多い地帯になるだろうと予想している。この予想は当たっている。

小西自身、地域根性など狭い見で瀬戸内海の素晴らしさをいっているのではないと述べて科学する心で説いていることに注目すべきである。

瀬戸内海的美しさは彼の主張のように星羅碁布、白砂青松、長汀曲浦の千態万状、自然の妙であるがこれは火山地帯のしからしめるものである。

散らばる島嶼の美しさは陸地から見るのと海上から見るのとでは大きく異なっている。彼はこうした視点から船舶による観光を説く。

今日、ハイ・モビリティになり船舶から航空機時代になっており、本四間の長大橋も三本かかり島から島への橋梁を入れると三十本に余る橋が架かっている。そういう点で内海を見る視点も大きく変わっている。景観はある点で阻害されたが違った景観が生まれたことも否定できない。

そもそも風景 - 景観というのはどのようなものをいうのか人それぞれの感慨に違いがあり一様には言えない。東山魁夷は「日本の美を求めて」のなかで『風景とは何であろうか。私達が風景を認識するのは個々の眼を通して心に感知することであるから厳密な意味では、誰にも同じ風景は存在しないと言える。ただ人間同士の心は互いに通じ合えるものである以上、私の風景は私達の風景となり得る』と景観論を披瀝している。景観は見る人の感動が裏打ちされていなければならないということであろう。

内海の景観については古来多くの文人墨客が詩歌に詠み、絵画にしているが小西も先人の詩歌を引用、人文科学的な視点もしている。千年前の昔、讃岐国司を務めた菅原道真の詩「晩春、松山館に遊ぶ」にも瀬戸内海の美しい風景を詠んだものがある。景観が人の心に与える影響も大きく内海沿岸から芸術家が輩出していることも偶然ではなからう。

現代においても皇太子殿下は、昭和58年の歌会始めに次の歌を詠んでいる。

雲間よりしなのめの光さしくれば瀬戸の島々浮き出でにけり

塩飽諸島訪問のさいの感慨である。本島という丸亀沖の島は瀬戸大橋の眺望が最も美しいところである。自然美と人工美が旨く調和したのであろう。架橋工団も東山魁夷画伯のアドバイスを受けて瀬戸大橋にライトブルーの色彩を採用したという。

昭和8年の歌会始めの預選歌に入った香川県の石井朝太郎の歌は次のようなものである。(注6)

うごくとも見えぬ白帆の連なりてあさしずかなり瀬戸の内海

これは燧灘の景色を詠んだものである。燧灘は備讃瀬戸とはひと味違った風景である。大正6年の預選歌にも香川県の堀野林治の歌が入っているがこの歌にも燧灘が詠まれている。勅題は「遠山雪」だが

ひうち灘もみぢの末のくもはれて伊豫のたかねに雪ふれるみゆ

与謝野鉄寛の短歌には次のような東讃の海的美を詠んだものがある。

逢坂の峠に見れば瀬戸の海みな美しき眉と目と肌

自然美は古くから称えられているがその自然の風景を公園とする考えは明治の日本には存在しなかった。小西は外国人の文献から啓蒙を受けたのである。

彼の主張のように国立公園法案が帝国議会を通過、立法化されるのは昭和6年であり、ようやく国民的合意に達したのであった。瀬戸内海が国立公園第一号として指定されるのは9年であり、彼の主張から20年以上が経っていた。

小西は海浜に国鉄が開通したことで美観が壊された、景勝地に原色の屋根の建物が建ち

景観が台無しになったと嘆いているが今日はこれに輪を掛けている。小西が乱開発に警告を發して百年近く経済、便利さが優先され今になって反省している現状である。『瀬戸内海の景致を擁護することは極めて必要な業である』と彼は明治に警告している。

保存だけでなく禿山への植樹や溜め池から溜め池へのプロムナードに街路樹を植えよとか保存だけでなく創出にも提言をしている。

いくら美観があっても観光客が来なくては発展しない、そこで外国観光客の誘致について帝国議会でも述べるが外国人のニーズにあったホテルの建設を訴える。博覧会のような一過性のイベントよりコンベンションシティーの建設を主張している。

長汀曲浦は大半が人工海岸になってしまった今日、これが景観に与えたことは大きい。漁業資源などにも言及しているが海洋汚染までは当時問題になってない。

ただ『風光明媚な内海の陸地すら百数十尺の地下、又数百尺の空中でない限り人間を傷害する黴菌に包囲され危険千万でおらねばならぬのに反し海洋の空気には大切なオゾンが適量に含有してよく黴菌を退治して補益するから海洋は結構である』と述べていることは注目に値する。

美しい景観は綺麗な環境にあってこそ生かされるのであり、名実共に美しいものでなくてはならないということであろう。

ちなみに遊覧が観光という語彙が変わっていくのは大正から昭和に入るときで、昭和3年には高松で観光博覧会が開かれ、いよいよ美観が資源として注目されてくるのである。

交通が船舶から鉄道、自動車になり、観光志向も当然それに伴い変わってゆき、本四架橋というニーズになっていくが架橋には反対意見もあり、昭和49年に新宮孝明が「本四架橋をストップせよ。瀬戸内海、鳴門架橋ができると瀬戸内海の景観は台無しになる。中止しないと後世に悔いを残す」という論文（注7）を記している。

現実には架橋がされる。この正否はそれこそ後世に評価されるだろう。正直いってもうこれ以上の人工構造物はつukらないことが瀬戸内海の景観を守ることになるう。

小西は『西洋人が些細な勝地をすら重んじて其保護に努むる美風を持っているのと対比すれば残念ながら日本人々がこれらの事柄に就いて如何に無頓着であるかを一層明瞭に知悉し得るではないか』と述べて景観の保存を訴える。自然美と人工美との調和については特に注文しており、人工を否定はしていない。この時の論が帝国議会での演説になっていくのである。この主張にはまったく同感である。

小西は景観の重点を自然美に置いてはいるが美の創出を否定しておらず返って積極的作

り出そうとしていることもうかがえる。明治42年，故郷の長尾・亀鶴公園の宮池のほとりに当時珍しかったソメイヨシノの桜苗を二千五百本も植えているのがその例である。そして昭和4年，近くの宇佐神社に「桜の碑」（注8）というものを独力で建てている。その碑文に彼の美に対する考え方が刻まれており景観とは何かという問いにも答えた形になっている。

碑文には，将来この池畔の桜花を見るために多くの人があるだろう。池には船を浮かべて喜ぶが将来，桜樹が古くなれば補植なりすべきであると書いている。水と緑，花という自然の創出でもある。

景観には水と山，海陸といった調和が不可欠だが東山は『山と海 - これが日本の風景を代表する二つの大きな特徴である』と述べ，複雑に入り組んだ長い海岸線，静かな砂浜，荒磯，内海と太平洋，日本海側といった風景があり四季折々の変化が楽しめるという日本の景観を称えている。小西の論と一致しており，林学博士田村剛も火山性の地形，地質に加えて樹木とのマッチを美観の理由にあげている。

人工だろうと自然だろうと調和をもって保存も創出もしなくてはなるまい。写真家のジョニー・ハイマース（注9）は『日本は自然が素晴らしい。段段畑や溜め池の風景，これらがコンクリートの建造物に変わりつつある。このままいくと22世紀には日本はコンクリートジャングルになってしまおう』と警告している。

東京のお台場やレインボブリッジ，横浜のベイブリッジ周辺を見てもあるいは淡路北端の明石海峡大橋取り付け口辺りもコンクリートばかりでこれでは小西も東山も泣くであろう。人の心が感じられないのである。

小西は，景観のタイプは古い 百景とか 八景， 三景などといったものから近年，八つのタイプに分けられるといわれるが海陸の両面から見ると十の分類ができるとしている。彼のいう風景は成因，性質，組織，変化などを基礎として広い意味でタイプを決めると面白いとしている。

いわく一，富士式（崇高）二，巖島式（爛美）三，橋立式（優雅）四，松島式（鮮麗）五，耶馬溪式（奇抜）六，武蔵野式（蒼茫）七，御嶽式（豪宕）八，日光式（端巖）九，遠州灘式（森漫）十，木曾式（幽邃）

瀬戸内はこのすべてを共有していると小西は述べている。

瀬戸内海を世界の湖沼と比べると湖の方が沈着，静止，寂漠，幽邃，陰鬱なのに対してこちらは陽発，活動，勇躍，端巖，明快であり，湖は紅葉の中に妻恋う雄鹿のような雰圍

気だが海には歓喜を感じて満開の花の下で美女を見るような高揚する気持ちになる。微妙な差があると小西は内海の美を高く評価するのである。

小西は、「瀬戸内海論」では、瀬戸内海全般について述べるのだが景観が大きいウエートを占めていることはいままでに述べたとおりである。“世界の宝石”だから彼の心を捉え、ここから各方面から言及していったのであろう。

結論的にいうと小西によって景観というものが従来の箱庭式とか盆景といったものから自然の景観美といったものに変化していったとみてもいいのではないだろうか。

日本の庭園が西洋のものと違う点は借景を生かしているという点で、やはりここにも自然美が大きいシエアを占めていたことが分かる。

自然景観を再発見するとする考え方は国立公園法の成立によって一気に定着、国民的合意に達する。この主張をしたのは小西であったことを忘れてはならない。(完)

特注 小西和(こにし・かのう)明治6年香川県生まれ、札幌農学校卒、北海道開発を志し、のち東京朝日新聞入社、日露戦争特派員、衆議院議員当選7回、昭和22年死去。

「口訳・瀬戸内海論」阿津秋良著、本名津森明。

注1 当時一県一中学校時代で愛媛県に統合されていた讃岐には中学校の設置は許されていない 注2 愛知県人、1863～1927。地理学者。号は矧川。札幌農学校卒、国粹主義者 注3 日記は海南文庫顕彰会蔵。注4 大正7年10月東京朝日新聞、香川新報所載。注5 ドイツ人、地理学者。1868日本旅行。旅行記は海老原政雄訳。注6 香川県人、三豊高等女学校長。注7 「リーダースダイジェスト」4月号所載。注8 長尾・宇佐神社にあり全文カタカナ。碑文は『コノ桜八明治三十七八年戦役ニ従事シタ私ノ記念トシテ明治四十年カラ四年間ニ苗木二千五百本ヲ埼玉県カラ取りヨセテ奉納イタシタモノデアリマス追々育ツテ花ガ咲キ森ヤ水ト調和シテ美ウナッテ来マシタソレデココガ亀鶴公園ト名ツケラレーツノ名所ニナリマシタ神様八御喜ビナサリ多勢ガ見物ニ集マル花ノ下ニ八色々店ガ出ル池ニ八遊ビ船ガ絶エズ夜八電灯ガ光リ渡ツテ賑フ有様デ歌ヒ歌踊ツテ楽シンデクレマス長イ年月ノ後ニ八木ガ自然ニ枯レテ来ルデセウカラソノ時々苗木ヲ植エテ補ハネバナリマセン仍テココニ石ヲ建テ之ヲ記シテ置キマス』昭和4年4月 注9 写真家、在日30年、香川県の委嘱を受け平成10年「四季風景写真事業」に参画

An Essay on Scenic Beauty by K. Konishi

Akira Tsumori

Abstract

The “ Essay on the Seto Inland Sea ” by Kanou Konishi, written at the beginning of the 20th century, is possibly the oldest comprehensive Japanese essay on the Seto Inland Sea. In the essay Konishi puts great emphasis on the scenic beauty of the sea. He once made a proposal of the “ National Park Bill ” claiming that the natural scenic beauty is the spirit of landscape. For people in Shikoku this is so-called the age of “ 3 Great Bridges over the Seto Inland Sea. ” This essay deals with what the scenic beauty is all about based on Konishi’s view of scenic beauty.

高松大学紀要

第 32 号

平成11年 9月25日 印刷

平成11年 9月30日 発行

編集発行

高 松 大 学
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064